

20. 膵ホルモン（インスリン・グルカゴン）の変動からみたアルコール肝障害の病態

野尻 義男 多田 信和
石川 善朗 菊池 晃
鬼原 彰 和田 武雄
(札幌大・1内)

目的・方法：アルコール肝障害の病態を血中膵ホルモン（インスリン・グルカゴン）の変動とその相互関係の面より追究するために、経口ブドウ糖負荷試験を実施し、血糖、血中インスリン（IRI）およびグルカゴン（IRG）反応を観察した。

成績：血糖曲線正常型の血中 IRI は対照群よりもやや高反応を示し、境界型および糖尿病型ではブドウ糖負荷後 30 分目の初期分泌の低下が認められたが、90 および 120 分目では逆に上昇を示した。一方正常型の血中 IRG は対照群よりも高値の傾向を示し、境界型および糖尿病型では有意の上昇を示した。以上の変化を両ホルモンの相互関係（I/G モル比）でみると、正常型では対照群と良く一致する変化を示したが、境界型および糖尿病型では明らかにその I/G モル比は低下した。

結論：以上より、アルコール肝障害患者の糖代謝異常には血中両ホルモンの相互関係の変化が密接に関係することが推測された。

21. 副甲状腺ホルモンのラジオイムノアッセイ

嘉手納成之 鈴木 邦治
(北大・内)

PTH Radioimmunoassay Kit “栄研” を使用し、測定感度、再現性を検討した。また、正常人15人、悪性腫瘍患者15人、血液透析中の尿毒症患者52人の血中濃度を測定した。

最小測定感度は、0.35 ng/ml であった。

PTH 高濃度血清を使用した時の再現性では、平均値=8.12 ng/ml、標準偏差=1.30 ng/ml 変異係数=16% であり、正常人血清を使用した場合は、平均値=0.48 ng/ml、標準偏差=0.20 ng/ml、変異係数=41% であった。

以上より、正常人血清を測定するには、さらに、Kit の精度を高める必要があると考える。

正常人の PTH 濃度は、平均値=0.46 ng/ml、標準偏差 0.45 ng/ml となり、正常値は、0~1.36 ng/ml となった。悪性腫瘍患者の濃度は、全例正常範囲であった。尿毒症患者の濃度は、1.33 ng/ml より 17.0 ng/ml までの値を示し、ほぼ全例が高値を示し、続発性副甲状腺機能亢進症の状態にあると考えられた。

22. び漫性肺描画を示した副甲状腺機能亢進症の骨スキャン

○伊藤 和夫 古舘 正従
入江 五朗
(北大・放)
中畑 元伸 嘉手納成之
鈴木 邦治 中川 昌一
(同・2内)
越野 勇 松下 通明
(同・1外)

術前の骨スキャンにて、肺野全体のび漫性描画の示された原発性副甲状腺機能亢進症の症例を経験し、術後の経過骨スキャンの肺野描出の推移、および骨 up-take 推移を合せて報告した。

症例は、22歳、女性、北大第2内科入院にて、副甲状腺腫による副甲状腺機能亢進症と診断され、同大第1外科にて腺腫摘出術を受けた。組織診は、clear cell adenoma であった。術前、全身性骨脱灰、一部骨の cystic formation が認められ、pyramidal nephrocalcinosis および relapsing pancreatitis が認められた。

術前骨スキャンは、全身骨への RI uptake 増強と、肺のび漫性描画がみられ、術後1カ月および3カ月の骨スキャンでは、肺野の描出が消失していった。骨 uptake の指標として、膝関節周囲の骨/軟部組織比についても検討した。術前術後の血清 Ca、AL-Pase、骨/軟部組織比および腎機能推移を観察し、肺描画および消失の機序について言及した。